

# 映画「マイマイ新子と千年の魔法」にみる「子ども」

甲南大学学生相談室 大谷祥子

## I. はじめに

心理療法において「子ども」は、単に対象としてだけでなく、様々な年齢や立場にある人の心のありようや動きを考える上でも重要な意味を持つ。樋口（1985）は、大人の心の中にも存在するイメージとしての子ども、すなわち「内なる子ども」について論じており、久米（2001）は母親面接に焦点を当てつつ心理療法過程において「内なる子ども」と出会うことの治療的意義を指摘している。また、河合（1994）は子どもの本を読むことの意味を述べる中で、心理療法とある種の「子どもの本」が共に「われわれがこの世に生きるといことの本質にかかわってくる」点において「不可分に結びついて」と述べて、児童文学の存在意義として「大人にも通じる言語表現を用いることと、子どもの目によってものを見ることと、その葛藤を克服してゆくこと」を挙げている。また河合（1985）は、子どもが行っている、外的現実を知った上で内的な人生を生きるということは、本当は大人にも必要だが「大人たちは外的現実とのかかわりに心を奪われすぎて、そのことを忘れ去ったり、気づかずにいたりする」とした上で、「外的世界と内的世界の両者とのかかわりによって、人間存在は確かな位置づけを得るのである。この世の中に自分をしっかりと位置づけること、それは健全であるための相当基本的な条件ではなかろうか」と述べている。「内なる子ども」を統合し生かしていくことは、「大人」としてこの世でしっかりと生きていくためにも必要な条件と言えるのではないだろうか。

学生相談室を訪れる大学生は、多くの場合、在学中に成人を迎え、卒業後社会人となることが意

識され、子どもから大人になるということが課題となる時期である。大人の心の中にも生きる「内なる子ども」について考えることは、この時期の学生について考える上でも有用であろうし、また、大学生自身が「子ども」に触れることも意義のあることと思われる。

さて、「子ども」には様々な要素が含まれるが、その中でも「子ども」の特徴の大きなものとして、先の河合（1985）の「外的現実を知った上で内的な人生を生きる」という言葉もあったように、内的な現実や超越性との結びつきの強さが挙げられるだろう。蜂屋（1985）は、「知の世界」であるこの世と、「信の世界」「超越の世界」であるあの世の対比について述べ、「知の世界における力もまだ弱い」子どもは、「どうにもならないもの、自分の力を超えるもの」に取りまかれており、「信の世界、超越の世界の比重が、おとなよりもずっと大きい」ということを指摘している。そして、子どもの特権として「この世に住みながら、あの世へ自由に往き来できる」ことを挙げている。また、樋口（1985）は、「内なる子ども」について述べる中で、「子どもはある意味でその人の『過去』であり、同時に『未来』をも意味している」ということを述べているが、「子ども」と「時間」は深く関係しているように思われる。「子ども」の中には「過去」と「未来」が同時に存在しうるし、これから育つ（育てられる）存在であるということには、「過去」あるいは「現在」と「未来」をつなぐという働きが含まれている。この世や外的現実とあの世や内的現実をつなぐ、そして異なる時間をつなぐ、など「子ども」には「つながり」をもたらすという側面があると言え

るのではないだろうか。

本稿では、子どもの世界や心の成長を描いた優れた作品であると思われる、アニメーション映画『マイマイ新子と千年の魔法』を取り上げ、物語を追いながら、この作品に現れた「子ども」について見ていきたい。特にその「つながり」をもたらず側面に注目していく。

## II. 作品の特徴

『マイマイ新子と千年の魔法』は、高木のぶ子が「日本版『赤毛のアン』」（高木、2009）として自身の子ども時代をモデルに描いた『マイマイ新子』を原作とし、片瀬須直の脚本・監督によりアニメーション映画化された作品である。昭和30年の山口県防府市国衙を舞台として、おでこにマイマイ（つむじ）を持つ想像力豊かな小学3年生の新子と東京からの転校生貴伊子を中心に、豊かな自然の中で共に遊び、様々な出来事に出会い成長していく子どもたちの姿が描かれている。2009年の公開当初の興行収入は芳しくなく東京都内では3週間で上映終了となったが、その後のレイトショー上映などをきっかけに観客を広げ、公開後1年以上というロングラン上映となった（廣田、2011より）。

映画化にあたり、基本的なエピソードは原作がもとになっているが、千年前の国衙＝「周防の国」に暮らす姫「諾子」（なぎこ＝幼少時の清少納言）が下働きの少女「千古」（ちふる）と友人になる物語が加わるなど、新たな物語として再構築されている。本稿では映画版の物語の内容面を扱うが、それ以外の面でもこの作品全体を見た場合に注目されるべき点は多数あると思われる。筆者にはそのすべてを適切に論じることは到底できないものの、一部ごく簡単に触れておきたい。まず特筆すべき点として、舞台となっている昭和30年の国衙の景色が、徹底的に考証して描きこまれており、原作者高木のぶ子が「180度、私の見ていた風景が再現されている」（廣田、2011）と述

べたほどということが挙げられる。それと共に、登場人物のセリフも山口弁で語られ、“いつか・どこか”の物語、ではなく、特定の時期の特定の場所の物語となっている。また、背景の音楽に使われているスキヤットは幼い子どものアニミズム的な体験世界を感じさせ、主人公新子が麦畑の中を進むときの視線を観客も体験するような画面構成がなされているなど、観る人に子どもの体験世界を味わわせるような力を持った作品になっている。これらは、音と映像を兼ね備えた映画作品ならではの特徴と言えるだろう。

## III. 物語のはじまり

### ～新子と貴伊子の出会い～

主人公新子は、麦畑の広がる緑豊かな国衙（山口県防府市）に祖父母、母親、妹と暮らす想像力豊かな少女である。父親は仕事の都合で離れて暮らしている。家族の中でも特に祖父小太郎は「おもしろいことはみーんなおじいちゃんがおしえてくれる」という存在で、千年前、国衙は周防の国の都であり、新子の家の近くを流れる川が直角に曲がっているのはその名残であることを新子に教えてくれたのも祖父である。祖父の話をもとに新子は千年前の町の様子を生き生きと空想し、一人遊んだりしていた。そんな新子のクラスに転校してきたのが、貴伊子である。貴伊子は幼い頃に病気で母親を亡くしており、父親と二人で東京から国衙に引っ越してくるが、学校生活にもまだなじめず、浮いた存在であった。そんな貴伊子に新子が興味を持ち、貴伊子の家を訪れたことを発端に二人は友だちになり、新子の「ひみつのたからもの博物館」や、祖父に作ってもらったハンモック、そして千年前の周防の国の空想を共有して遊ぶようになる。さらに、貴伊子も他の子どもたちの遊びの輪に溶け込んでいき、同級生のシゲルや年長のタツヨシ・ミツル、新子の妹光子などと共にダム池作りに熱中するようになる。完成したダム池には一匹の金魚が迷い込んで来る。子どもた

ちはその金魚に憧れの先生と同じ「ひづる」という名前をつけるが、貴伊子が持ち込んだ母の香水が思いがけない原因となり「ひづる」は突然死んでしまう。子どもたちは皆で金魚のお葬式を行う。母親の死を重ねて深く落ち込んだ様子の貴伊子を見た新子は「千年の魔法」によって金魚が生き返ることに望みを託し、似た金魚を見たという話をもとに、他の子どもたちと共に、生き返った「ひづる」を探す……。

新子との出会い以前は、貴伊子は転校生として浮いているというだけでなく、その家の庭に生えている「ウツギ」に象徴されるようにどこかうつろな様子の少女であるが、正反対のような新子の訪れを契機に変化が起きていく。川に入って汚れながら遊び、他の子どもたちと共に防空壕を探検してスリルを味わったりしながら、さまざまな感覚や感情が息づき動き始めたようである。もう一方の新子も、貴伊子という共有する相手ができることで、空想の世界がより広がりが増し、大切なものとなっていったように見える。そもそも新子が貴伊子の家を訪れたのは、貴伊子とシゲルとのトラブルにおける貴伊子のふるまいに新子が疑問を持ったことがきっかけであった。新子にとって貴伊子は、境遇や住んでいる場所なども含め、自分とは“違う”“わからない”ところのある存在であり、新子が貴伊子の家までついて行ったのは、そんな貴伊子のことを、わかりたい、知りたい、という新子の心の動きがもとになっていると思われる。二人にとってお互いが自分にはないものを持つ相手であり、それゆえに惹きつけられ、また、出会いのインパクトも大きかったのだろう。そして、お互いに、秘密や空想を共有し、相手の思いを感じ取ることができる重要な他者となっていった。新子にとって貴伊子が大切な存在となったからこそ、貴伊子の母の死と重なる金魚の死は重大な意味を持ち、それを乗り越えるための「千年の魔法」をより切実に求めることとなったと思われる。また、貴伊子にとっても新子が大切な存

在になっていたからこそ、後に触れるように、貴伊子が、わからなくなってしまった新子の心をわかろうとし、貴伊子自身にとって決定的に大切なものを見つけることになったのだろう。須藤(2010)は、前青年期における親友関係(チャムシップ)について論じる中で、現実場面でのチャムシップが内面における自己との関係を開拓するという、チャムシップが「『他者を通して自己に出会う』ことを可能にする」ということについて述べているが、この新子と貴伊子という二人の子どもとの出会いが、この物語のすべての始まりである。

#### IV. 親と「子ども」

この物語には貴伊子とタツヨシという二人の、同性の親を亡くした子どもが登場する。貴伊子の母親とのつながりの模索と、タツヨシの父親の死にまつわるできごとは、この作品のストーリー全体の中でも重要な要素となっている。貴伊子の場合、ほとんど記憶がないくらいの幼い時期に死別しており、写真や遺品、父親の話から母を想像しようとするがうまくできずにいた。タツヨシの場合は物語の後半で父親が自死するまで共に暮らしてはいたのだが、父親に対して複雑な思いを抱き続けていたようであり、父の死をきっかけにその思いが爆発する。親、特に同性の親というのは、子どもにとって最も身近なモデルであり、現在の、そして将来の自分自身のイメージを作っていく上での最初の基準を与えるような存在であると言えよう。実際に生きてそばにいるかいないかに関わらず、どのような親像を持っているのか、どのようなつながりを感じているのかが、子どもにとって重大な問題であることは間違いないだろう。こうした、子と親との関係における親のあり方について考えるとき、親が養育者としての役割をいかにしっかりと果たすか、大人としてどのように関わるか、ということについて考えられることが一般的である。しかしながら、この物語の中

で描かれている貴伊子の母親とのつながりの模索とその回復の過程、タツヨシと父親との関係を見ると、子と親が互いにつながり合うときに、大人としての親というだけでなく、親の中の“子ども”の部分、「内なる子ども」の果たす働きの重要性についても考えさせられる。

まずタツヨシの場合について見ておきたい。タツヨシの父は「まっすぐな警官」として周囲の信頼篤く、タツヨシが持ち歩いている父親の木刀は「決死隊の木刀」として、金魚の「ひづる」の死後バラバラになりかけた子どもたちを一つにする「明日の約束」の象徴にもなる。タツヨシ自身にとっても父親は尊敬の対象であり、また同時に気軽に近寄り難いものも感じている様子であった。その父が実は賭博で多額の借金を負っており、その責任をとるといふ遺書を残して突然自死する。祖父小太郎らの会話から「バー・カリフォルニアの女」と「ヤクザ」が悪いのだと思った新子と共に、タツヨシは港町まで「カタキウチ」に行く。そこで普段から笑顔を見せることも少なく口数も少ないタツヨシが、酒を飲んだ父親が「勝てるベーゴマの削り方」を教えると言うのを断って殴られたことを話し返す。

普段の立派な父親と違う、酒を飲んだ際の振る舞いはタツヨシにとって受け入れがたいものだったかもしれない。父親は、酒場でも酔ったときだけ目を輝かせて子どもの頃の遊びの話をしていたということであり、父親の普段顔を出すことのできない子どもの部分が、賭博や酔った時の振る舞いとなって現れていたとも想像される。タツヨシは店の窓の下を子どもの頃の父親が走っていく幻を見、「できるもんなら…わしも一緒に走って行きたえ」<sup>註1)</sup>と、新子と共に父の幻を追いかけ、声を上げて走る。走りきったタツヨシは、新子に明日引越すことを告げ、自分は「まともな大人」になって、自分の子どもにベーゴマの削り方や風の脚の付け方をちゃんと教える、という将来への決意を話す。父親への様々な思いを含んだ決意だ

が、この決意は、タツヨシ自身が子どもの自分を抑えて早く大人になろうとする姿勢にもつながり、危うさもはらんでいるように思える。それに対する新子の「へじゃけどタツヨシ！ その前にがんばって、いっしょうけんめいあそぼうやあ！ もっともっというんな遊び覚えて、それを自分の子供に伝えちゃうよ！（中略）決死隊の戦友……!!」という言葉は、タツヨシ自身が子どもであることを守ろうとするものであり、物理的に離れても共に生きていこうという呼びかけの言葉である。その言葉に、タツヨシは「とうとう本気で」笑う。

次に貴伊子の場合についてみていく。物語の始めから、貴伊子は母の遺品の香水をつけて登校するなど、母親とのつながりを模索しているようであるが、うまくいかない。さらに、理想の母親像とでも言えるものをひづる先生に見出すが、その分身のような金魚の「ひづる」の死と共に、理想だけでは済まない現実を生きているひづる先生の姿を垣間見ることとなる。そして、金魚の「ひづる」のお葬式で、本気で拝めば8月15日に「ひづる」が帰って来る、というシゲルの言葉を貴伊子は否定し、「お母さんのことも…もう思い出さないようにしよう…」と、母のイメージを求めることさえあきらめようとする。そうした貴伊子に対し「千年の魔法」で生き返ったひづるを探すことで希望をよみがえらそうとする新子だったが、タツヨシの父の死がきっかけで、新子自身が「千年の魔法」を「頭の中のこしらえごと」として手放そうとする。このとき貴伊子は新子からの手紙が「どういう意味だかわかんない」と思い、新子と離れ離れになってしまったことを感じる。

しかしここで、貴伊子は、ただ「わからない」で終わらせずに、わからなくなってしまった新子の心を想像しようとする。そうするうちに、千年前のイメージと母の面影、新子や他の友人との約束などが重なりあい、貴伊子はおでこにマイマイを持って、千年前の世界に入り、諾子になってい



る。そうして、諾子が「一番笑ってほしい」と思っている千古のところへ向かう。その後千年前の世界から戻った貴伊子は、「あたし見つけたよ!」と、母の子どもの頃の写真を新子に見せる。写真の母は、それまで貴伊子が眺めていた写真の、きれいな大人の女性になった母親とは違い、いかにもやんちゃな子どもであった。千年前から戻った後の貴伊子は、新子よりも早く走り、それまでとは違う力強さを持っているようであり、新子に「お母さん似」だと指摘される。

貴伊子が「見つけた」のは何であったのか。一つには母の写真であるが、それは子どもとしての母親、母親の内なる子どもを見つけ出会うことができた、ということであろうし、同時に貴伊子が自分自身とつながるといことも起きているように思われる。この「見つけた」がどのように起こったのか、具体的には描かれぬが、新子と貴伊子の出会いの始まりで新子が貴伊子の家を訪れたのと逆に、貴伊子が新子の心を一生懸命想像してわかれようとし、千年前の世界で諾子の人格を借りて千古の家を訪れた後に起こっている。自ら他者を求め、相手の領域に出向いて働きかけること、それができたことは、貴伊子にとって決定的な変化であろう。

タツヨシと貴伊子は、それぞれ事情は違っているが、ともに親の中の「子ども」が見えない、触れられない状態であったと言えるだろう。そこから、貴伊子の場合は、新子との出会いをはじめとして、物語の終わりに、母親の内なる子どもと共に自分自身とも出会うことができたようである。タツヨシの場合は、父親の死が結果的に、父親の中の「子ども」に触れることにつながったようにも見える。本当は、生きている父とつながり心を通わせたかったはずであり、涙しながら漏らした「父ちゃん…」という呼びかけや新子に語った決意は切ないが、父への感情を吐露した後、新子との別れの際に「とうとう本気で」笑う姿は、それ以前の感情を表に出さない様子からは大きな

変化が感じられる。

子どもにとって、親の「内なる子ども」はどのような意味を持つだろうか。まず一つには、内面に「子ども」を生かしている存在として親があることは、内的な現実や超越性につながり続けながら、そうした面では子どもからの連続性の中で生きている人の像を示すことになるだろう。またそれは、親が外的な現実だけでなく内的な現実や超越性も含めた、子どもが生きている世界の全体(に近いもの)を共有できる存在であるということを示すことになり、親子の関係の中で、大人—子どもという上下関係だけではない、「子ども」同士として対等に共感しあい、つながるための、チャンネルのような役割を果たすように思われる。子どもは、必然的に、成長して大人になることを期待される存在である。しかし同時に、今「子ども」であることが十分に保障される必要がある。子どもにとって、親の「内なる子ども」が開かれ、触れられる状態にあることは、“今「子ども」であること”そのものを肯定されることにもつながるのではないだろうか。

## V. 「千年の魔法」と「つながり」

作品のタイトルにもなっている「千年の魔法」についても考えておきたい。先のタツヨシと貴伊子の場合にも「親の死」が関わっていたが、この作品の中には「死」が様々な形であらわれている。金魚の「ひづる」の死に対して新子が願ったのが「千年の(土地の)魔法」で「ひづる」が生き返り、「今度は千年生き続ける」ことであった。「死」は生きているものには必ず訪れ避けることのできないものであるが、自分にとって大切な存在の死、そして自分自身の死、というものは人が最も受け入れ難いものでもある。「千年の魔法」は、そうした「死」の断絶する力に対抗する力を表しているように思える。それは一つには世代のつながりであり、そして長い時を超えてつながりあえるということである。

まず、世代のつながりだが、ある一つの命（たとえば「自分」の命）だけを考えると死は“終わり”になるが、次の世代に受け継がれていくというつながりを考えると、一つの命の終わりはすべての終わりではない。先に、貴伊子とタツヨシの親子のつながりを取り上げた。その中でタツヨシが自分の子どもを育てるということについての決意を述べていたが、親や祖父母から子や孫へという血のつながりに限らず、次の世代としての「子ども」を育てることによって、一つの命の死が“終わり”にはならなくなる。また、物語の舞台となっている国衛が千年前の都の名残を残しているように、死と生が繰り返され、一代ずつのつながりが続いて、例えば千年という長い時間になるのである。その時間が土地に堆積している、その上で今生きているということは「魔法」のように不思議なこととも言える。

そしてもう一つが、新子たちが千年前に生きた諾子を想像し、貴伊子が千年前の世界へ行ったように、千年という長い時を超えて人と人が出会ったり、響きあったりすることができる、ということである。貴伊子と諾子は、千年という時の隔たりはあっても、どちらもそれぞれに“今”を生きて、悩み考えているという点において同じであり、共鳴しあった。貴伊子が訪れた千年前の世界は“本当の”千年前なのか想像の世界なのか、どちらであっても、千年前に生きたと思われる同世代の女の子とも深く共感し合えるし、千年後に生きるかもしれない人とも共感し合うことができる、ということに意味がある。それは、千年前の女の子の中に、あるいは千年後の女の子の中に自分が生きる可能性、“今”が“永遠”に通じていく可能性を示している。

この作品には、映画を観るわれわれからすると過去である昭和30年が舞台＝今であり、その昭和30年に生きる新子から見て千年の昔に生きた諾子が描かれる、という構造がある。さらに千年前の国衛で諾子が「何百年も前から」の土地の歴史を

聞くシーンが出てくる。「千年の魔法」は諾子も、そして映画を観るわれわれも包んでいるかのである。諾子の「千年たっても生えておる松よ、懐かしい今日のことをいつまでも覚えておいておくれ。昔にも人はいる…千年経った先にも誰がいる」というセリフがあるのだが、時をこえて自分が他者とつながっていることを感じられる、そのことが“今”の課題を乗り越える力になり、「かけがえのない自分」であることと同時に、「たかさんの人が生きて死んでいく中の一人にすぎない自分」という時間的空間的な広がりを見ることが、“今”を生きる原動力につながっているようであるのが興味深い。河合（1987）は、「はかないこの世は、実は時空を超えた世界によって裏打ちされており、その存在を知ることによって人間はほんとうに安心することができる」と述べるとともに、「この世の時空を超えた世界」は「この世のこと」に縛られ過ぎる大人ではなく、「子ども」がよく知るものである、と指摘している。こうした時間や空間を超えた出会いをなしうるのも「子ども」の働きと言えるかもしれない。過去から未来への世代のつながりに気付くことができるのも、時空を超えたつながりをもたらししているのも、千年前や千年先を想像する力である。新子の「タツヨシの父ちゃんも…貴伊子のお母さんも…うちらが忘れんかったら、いつまでもこの辺におってよ」という言葉のように、亡くなってしまった人も、その人を想像する人がいる限り、想像する人の内的現実においては存在し続ける。貴伊子やタツヨシのように、亡くなった人の心を想像し、死後につながりを作り直すということもあり得るのである。想像は内的なものであるが、それが外的な現実を変える力を持ったり、外的な現実を生きる支えとなったりもする。

## VI. おわりに

作品の最後、祖父が亡くなったことにより、それまで離れて暮らしてきた父のもとへ移ることに

なり、新子が国衙を去っていく。国衙に残る貴伊子は、すっかり土地の子になった様子であり、祖父の死や友人との別れといった悲しみやさびしさよりは、力強く成長していく新子たちの新しい季節の始まりを思わせるさわやかな表情が描かれている。千年の時を超えてもつながりあえる新子らは、亡くなった祖父とも、物理的に離れてしまう友人とも、必ずつながりあえるという安心感に支えられているのかもしれない。

物語をたどってきて、改めて「外的世界と内的世界の両者とのかかわりによって、人間存在は確かな位置づけを得るのである」という河合(1985)の言葉が思い出される。大人になる、というイメージの中に、内面に「子ども」を生かし続けているということも、忘れずに入れておきたいものである。昨今、大学卒業後の就職・就業に向けての準備教育がクローズアップされがちであるが、一人の大人として内的・外的に自立して社会を成立させる一員となる準備、ということを大きな視点でとらえると、大学生の時期に、自らの内なる子どもとの付き合い方、生かし方ということについても学んでおく必要があるのではないだろうか。

本稿では、アニメーション映画「マイマイ新子と千年の魔法」の物語を追いつつ、そこにあらわれた「子ども」についてみてきた。貴伊子の母とタツヨシの父以外の新子らに関わる大人、特に新子の祖父小太郎の存在についてや、「子ども」と切り離すことのできない「遊ぶ」ということについて、など、本稿においては検討できなかった点も多数残っている。特に、小学3年生(10歳前後)という、新子や貴伊子の年齢は心理発達の重要な意味を持つ年齢であり、この年齢の子ども

の心の世界のありようという観点からこの物語全体を見てみると、また違ったことも見えてくるかもしれない。また、本稿では作品として完成した映画の物語の内容に焦点を当てたため、制作過程や上映から観客を広げていった過程など、作品を取りまいて起こったできごとについては詳しく触れなかった。最後に一つだけ触れておくと、制作過程において監督の片渕が防府と清少納言の関係に気づき、清少納言の残した作品から「千年前にそこにいた女の子の顔が見えるようになった」ところから作品が完成に向かった(廣田, 2011)ということである。この作品の存在そのものが、時を超えて人が出会える証拠と言えるのではないだろうか。

#### 註

1) 登場人物のセリフは廣田(2011)の「アフレコ台本採録」をもとに引用した。

#### 文 献

- 蜂屋 慶 1985 子どもと神さま、子どもとお化け  
河合隼雄(編)『子どもと生きる』 118-134
- 樋口和彦 1985 内なる子ども——深層心理学的考察  
河合隼雄(編)『子どもと生きる』 154-171
- 廣田恵介(構成・執筆) 2011 メイキングオブ マイマイ新子と千年の魔法 一迅社
- 河合隼雄 1994 河合隼雄著作集4 児童文学の世界  
岩波書店
- 河合隼雄 1987 子どもの宇宙 岩波新書
- 河合隼雄 1985 子どもとファンタジー 河合隼雄(編)『子どもと生きる』 135-153
- 久米禎子 2001 心理療法における「内なる子ども」についての一考察——母親の語る「子ども」を手がかりに—— 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要 第5号 81-88
- 須藤春佳 2010 前青年期の親友関係「チャムシップ」に関する心理臨床学的研究 風間書房
- 高木のぶ子 2009 マイマイ新子 新潮文庫

## ABSTRACT

On the Images of “Child” in “Mai-Mai-Shinko to Sen-Nen no Mahou”

OHTANI, Sachiko

*Konan University*

This paper is about the images of “Child”, especially the connective function of “Child”, in an animation movie “Mai-Mai-Shinko to Sen-Nen no Mahou”. The episode of two children, Kiiko and Tatsuyoshi, seems to indicate the importance of the parent’s “inner child” in relationships with his or her children. By the connective function of “Child”, we can connect with other generations and get contact with others irrespective of time and space. “Child” may help us to live our life including “death”.

*Key Words* : inner child, connective function, death

---